

食を通じて幸せを届ける

—浜のお母さんの力で元気なまちづくり—

南三陸おふくろの味研究会
小山 れえ子

1. 地域の概要

私たちの住む南三陸町は、宮城県の北東部に位置し、複雑に入り組んだリアス海岸特有の地形と緑豊かな島々が美しい景観を見せる志津川湾に面している(図1)。

この環境を生かし、湾内では養殖業や漁船漁業、アワビ・ウニなどの採介藻漁業が行われているほか、新しく造成された高台には平成29年に「さんさん商店街」が開設されるなど新たな町が形成されてきた。また、令和4年10月には震災伝承館がオープンし、今まで以上のにぎわいが期待される。



図1 志津川地区の位置

2. 漁業の概要

会の中心メンバーが所属する宮城県漁業協同組合志津川支所の組合員数は635人で、ギンザケ、ワカメ、カキなどの養殖業のほか、刺し網、定置網、タコ籠漁などの漁船漁業、アワビ・ウニなどの採介藻漁業が営まれている。令和3年度の水揚げ金額は40億1,000万円でこのうち約9割が養殖業であり、品目別で見るとギンザケが最も多く、次いでワカメ、カキの順となっている(図2)。震災前の平成22年度と比較すると約5億円上回り、東日本大震災から復興を遂げることができた。

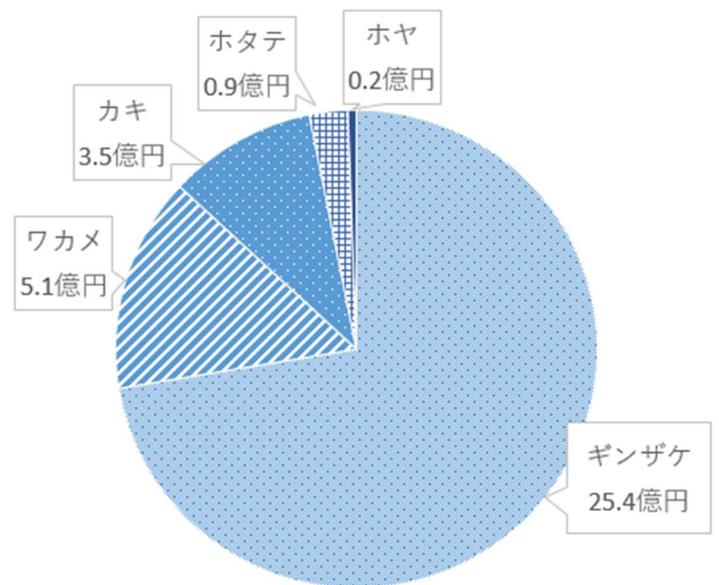


図2 養殖品目別の水揚げ金額

3. 研究グループの組織と運営

南三陸おふくろの味研究会は、宮城県漁業協同組合志津川支所女性部が中心となり、農業関係者などたくさんの団体の協力を得て、平成26年7月に設立した。現在は会長1人、副会長1人、会計1人、幹事1人、監事2人の

計6人の会員で活動している。「食すると幸せな気分になる」をテーマにおふくろの味を詰め込んだ「おかんの缶詰」を製作し、各種イベントで販売するほか、インターネットで全国販売も行っている。

4. 研究・実践活動の取り組み課題選定の動機

私たちは、東日本大震災により計り知れないほど多くのものを失ったが、震災直後から国・県などの復旧・復興事業に加え、国内のみならず世界中の方々から支援や励ましをいただき、少しずつ前を向いて活動できるようになった。しかし、復興に時間を要したことや住環境が大きく変化したことなどから人口の流出は進んだ。

そこで私たちは「定住人口の減少が地域としての活力の低下につながっているのでは」と考え、「地元の海と山のなりわい関係者の連携を強めること」と「生産に携わる女性の活躍の場を広げ、地域内外を問わず人々が活発的に交流する活力ある地域をつくること」の2つを目的とし、震災時に感じた「食」の大切さを伝えるため、「食を通じて幸せを届ける」プロジェクトを始めることとした。

なお、プロジェクトを実施するに当たっては、①生産・商品候補の発掘、②商品開発・製造・販売、③情報発信・交流活動の展開の3つの柱を掲げ、南三陸町ならではの食材をアピールしていくことにした。

5. 研究・実践活動の状況および成果

(1) 生産・商品候補の発掘

地元の食材を使ってどのような商品が作れるか、誰をターゲットにするかなど、町内にある農産加工グループや南三陸町観光協会など関係者を集め、月に一度プロジェクト会議を開催し、意見を交わした。会議は約1年間毎月開催し、話し合いを進める中でたどり着いたのは、震災時に救援物資として重宝した缶詰だった。缶詰なら「保存食の大切さ」と「南三陸の豊かな海の幸の素晴らしさ」を全国に発信できるのではないかと考え、地元南三陸産の水産物で製作することを決意した。また、町内で缶詰を製作するためには施設および機材が必要となることから、施設は宮城県漁業協同組合志津川支所の協力を得て、漁協の敷地内にあるコンテナハウスを使用させてもらえるこ



写真1 県漁協と連携強化



写真2 魚市場キッチン

とになった(写真1、2)。なお、必要な機材は歌津・志津川・戸倉の3地区の団体に設立された「南三陸ブランド戦略協議会」に対し、キリンビールマーケティング株式会社から支援金をいただき、購入した。

(2) 商品開発・製造・販売

まず、「食すると幸せな気分になる」をテーマに、おふくろの味を詰め込んだ「おかんの缶詰」を作ろうと商品開発に取り組んだ(写真3)。ターゲット層は口コミで発信力のある30~50代に絞り、コンセプトを酒のつまみにもなる高級感あふれる商品と定め、カキやホタテ、豆類など南三陸のさまざまな食材を使って試作を重ねた(写真4)。試作品は、関係者だけでなく町内のイベント参加者にも試食してもらい、アンケートを取りながら1年以上試行錯誤した結果、評判のよかったタコ、カキ、ホヤ、ムール貝の缶詰を商品化することとした。味付けはシンプルなアヒージョと醤油麹煮の2種類とし、食材そのものが持つおいしさを味わえる調理方法にした。その結果、そのまま食べてもおいしい、ちょっと一工夫して別の料理にも活用できる缶詰に仕上がった。原価計算をした上で価格は1缶当たりカキ・ムール貝シリーズを750円、タコ・ホヤシリーズを640円に設定した。

通年販売できる缶詰のほかに、季節限定商品としてアワビやウニの缶詰も製作した。ウニの缶詰は、会員の「白いご飯のおかずとして、ウニを玉ねぎと一緒に煮て食べていた」という思い出のエピソードからヒントを得て、「ウニたまちゃん」として商品化した。アワビとウニどちらの缶詰もたくさんの方に購入していただき、毎年完売している。



写真3 商品開発の様子



写真4 缶詰の候補となった食材

商品が完成し、初めて販売したイベントは志津川地区内で毎月1回開催される「復興市」だった。商品を購入してもらえるか不安な気持ちが大きかったが、たくさん購入していただくことができた。お客さんの笑顔と商品に対する高い評価、励ましの言葉は、私たちが活動する上で大きな活力となった。

(3) 情報発信と交流活動の展開

イベントおよびインターネットでの缶詰販売のほかにも、復興のために来

てくれた建設作業員や県内外から来てくれたボランティアの方々、体験ツアーの参加者に料理を振る舞い、支援に対して感謝を伝え、地域内外の人と交流する場として交流食堂を開設した(写真5)。今でも定期的に県内外の大学生との交流会やキンビールマーケティング株式会社の新入社員研修の受け入れを行っている。交流食堂を開設したことで交流の幅が広がり、地域の活性化に大きく貢献できていると実感している(写真6)。



写真5 体験ツアーの受け入れ



写真6 大学生との交流会

長引く新型コロナウイルス感染症の影響で、交流会を開催することが難しくなっているが、オンラインで購入者と交流会を開催するなど、人と人のつながりを大切にし、応援してくれる方々に感謝を伝えることを忘れずに活動している。

昨年度はキンビールマーケティング株式会社のキャンペーン商品として当会の缶詰を使っていた。このように震災時から今までたくさんの方々にご支援いただき、改めて多くの人に支えられながら活動できていることを実感した。

6. 波及効果

(1) 南三陸町のブランド産品

活動を続けているうちにマスメディアに取り上げられることも増え、全国の方々に「南三陸町」を知ってもらう機会が創出され、私たちの缶詰も知名度が上がっていった。今では、南三陸町のブランド産品として認識されるようになり、南三陸ワイナリー株式会社をはじめとする地域企業の商品とセットにした販売も行われるようになった(写真7)。これからもさらに活力ある地域となるよう、地元企業と協力して活動していきたい。



写真7 缶詰とワインのセット商品

(2) 人と人とのつながり

震災前は、地元であっても海と山のなりわい関係者同士の関わりが少なかったが、プロジェクトを通じて両者が協力して商品開発を進めることで連携が強まり、今では生産・収穫したものを物々交換する仲にまで深まるとともに、私たちの活動拠点が地域内外の人の交流の場としてにぎわいをつくり出すまでになった。

また、作り手同士だけでなく、ボランティアとして来ていただいた方々とも10年以上たった今でも連絡を取ることがある。継続して商品を購入してくれている人や定期的に連絡を取り合う人など、人と人とのつながりは私たちが活動する上で大きな糧となっている。

(3) 生産者への手助けと社会貢献

缶詰販売は平成28年から開始し、4年間で累計10万個売り上げた。毎年売上金額は800万～1,000万円程度で、令和3年度においては1.8万缶、約860万円の売り上げとなった。設立当初から缶詰の製造・販売は生産者の一助や社会貢献の一環になると考え、毎年フードバンクへ缶詰を寄付し、食糧支援も行っている。

7. 今後の課題や計画と問題点

(1) 新商品の開発

今後は、新商品として南三陸の海の幸を使った燻製品の商品化を目指している。令和3年には、カキ・ホタテを使用して試作会を実施した(写真8)。初めての試みだったこともあり、塩味が強く食感も硬くなってしまったが、試作会で課題を見つけ出すことができた。今後も試行錯誤を重ね課題を解決し、新たな商品化を目指していくこととしている。



写真8 試作会の様子

(2) 人材の確保

設立当初は約30人のメンバーが所属していたが、製造・販売までの道のりが長く、ボランティアとしての活動であったことから多くの方が離れてしまった。しかし、利益が出るようになってからは労働条件を決めた上で活動できるようになり、令和4年度には新たに1人が加入した。生産に携わる女性の活躍の場を広げるためにも、今後は若手にも呼びかけ、事業の継続・発展を目指していきたい。

「南三陸おふくろの味研究会」は、私たちにとって「生きがい」「楽しい仲間と楽しい時間を過ごせる唯一無二の場所」となっている。そんな場所を

つくりことができたのは、周囲の支えがあったからこそである。これからも今までご支援くださった方々に感謝を伝え、全国の人に食を通じて幸せを届け、同時に南三陸町を元気なまちにしていきたい。